

Cheer Up けいはんな

この街で働き、この街を愛し、この街を誇りに思う。そんな想いを持つ方から、けいはんな学研都市をさらに豊かに、楽しく、充実させていくための提言をいただきます。

今号でけいはんなViewは、50号という区切りを迎えました。これを記念し、このコーナーでは、次の50号、未来のけいはんなView100号に向けて、「けいはんなの未来像(あって欲しい姿)」について、お二人に対談をしていただきました。

対談は、けいはんな学研都市の中核機関である奈良先端科学技術大学院大学のトップに今年度から新たに就任された塩崎一裕学長と、関西文化学術研究都市推進機構の堀場厚理事長です。

お二人は奇しくもアメリカ・カリフォルニア大学(UC)に、片や教員、片や学生として在籍した経歴があり、米国での経験やその後の人生を振り返りながら、けいはんなの課題や今後を語り合う機会となりました。

トップ対談



公益財団法人 関西文化学術研究都市推進機構

堀場 厚 理事長

国立大学法人 奈良先端科学技術大学院大学

塩崎 一裕 学長

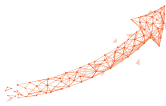
堀場(以下、堀) 先生はUCデービス校ですか。私はUCアーバイン校で学びました。電気工学に入りましたが卒業論文は機械系の環境問題、修士論文は電気工学で書きました。

塩崎(以下、塩) ご縁がありますね。私は日本で生物系の大学院を出た後、博士研究員としてサンディエゴの研究

所で4年間の研究生活を送り、UCで教員採用されました。

堀 アメリカの大学で感じるの、学生や教授たちの緊張感の強さですね。学部生の頃の宿題の多さやスピーチをさせられる辛さは、1カ月ただけで「もう無理」と思うほどで、いま思い出しても嫌な気持ちになるんですよ。(笑)

塩 教える側の緊張感も半端ではありません。学生から5段階評価を受けるし、試験でエッセイを書かせる時でも、部分点をどうつけるか、後で学生に揚げ足をとられないように…と気が抜けません。



世界の競争相手と伍して いくためには

堀 企業でもアカデミアでも、各国でこうした経験を経た人たちが切磋琢磨しています。そのような荒波のなかで、日本の研究機関が世界の競争相手と勝負していくためには、緊張感を持った研究者の存在が必要不可欠です。日本で教育を受けた人が優秀でないというわけではありませんが、世界レベルで通用するようになるまでにはギャップがあります。

塩 海外でもまれてきた人とともに、いかに新しいものを生み出し、それを発信するかが、世界的な勝負になりますね。

堀 そこがけいはんなが成功するポイントです。アカデミアと企業がどうコラボレート（協調）するか。国際競争力をつける為に重要なのは、やはり人です。

塩 けいはんなの目指すイノベーションは、大学単独ではできません。研究室でイノベーションが出てくるわけではない。新しいことを発見したり発明するのが研究室で、企業とともに実業化して社会的、経済的にインパクトがあるものに仕上げるのがイノベーションです。

本気で交流すれば、扉が開く

堀 学問の独立性の名のもとにガラパゴス化した大学では新しいものが出てこない。私は3年前、京都大学の山極壽一前総長らと「京都クオリア会議」を立ち上げ、京都の大学と企業のトップが情報交換する場を作りました。我々が持つ社会的ニーズと、先生方による専門性のコラボレーションが必要だと考えたからです。実際、先生方もそういう情報を求めておられることが分かりましたし、また企業同士の横のつながりも生まれました。この活動をさらに本格化させるため、今年からは新たに「京都クオリアフォーラム」を設立し、イノベーションの創出や人材育成の促進に取り組んでいます。塩崎先生も是非、参画ください。

塩 ありがとうございます。こちらこそ、ぜひお願いします。日本の大学の先生には、公務員というメンタリティーがあって、その辺の感覚がアメリカの先生方とは違う。また、研究者には自らの興味に集中する傾向があって、社会に向けてチャンスやインパクトがあるかという視点が欠けるきらいがありますね。

堀 研究者には「極める」癖があるために、アバウトなことに関心を向けるの

が不得意かもしれないですね。

塩 研究者を実験室から引っ張り出さないといけませんね。

堀 けいはんなにも言えることですが、気心の知れた本当の意味での交流をすることが大事です。本気でアカデミアと組めば、扉が開く。

けいはんなの立地は イノベーション創出に最適

塩 成果を上げようと思えば、双方が自分の持っているものをオープンにして、一緒にやろうとしないとだめですね。

堀 お互いがもう少し、歩み寄ればいい。最後は「人間」じゃないですか。そのためには、ロケーション的にも近くないとできない。けいはんなはその点で、素晴らしい。また企業の場合は、トップ同士が合意すると、現場の交流も一挙に広まる。その習慣ができれば、本来の意味のオープンイノベーションになる。

塩 大学の場合は逆に、トップが「やれやれ」と言っても、「いいです」という先生もいる。交流することの楽しさを見つけてやることも大事だと思います。

(こうした調子で、グローバル視点でのさまざまな議論が続いた後)



堀場 厚 ほりば あつし
1971年 甲南大学理学部応用物理学科卒
オルソン・ホリバ社(米国)入社
1972年 堀場製作所入社
ホリバ・インターナショナル社(米国)出向
1977年 米カリフォルニア大学大学院工学部電子工学科修了
堀場製作所海外技術部長
1982年 取締役海外本部長
1988年 専務取締役営業本部長
1992年 代表取締役社長
2005年 代表取締役会長兼社長
2018年 代表取締役会長兼グループCEO
2020年 関西文化学術研究都市推進機構 理事長



塩崎 一裕 しおざき かずひろ
1992年 京都大学大学院理学研究科博士課程修了(理学博士)
1992年 スクリップス研究所(米国)博士研究員
1998年 米カリフォルニア大学デービス校 (UC Davis) 微生物学科 助教授
2002年 同 准教授
2008年 同 教授、UC Davis がんセンター メンバー
2011年 奈良先端科学技術大学院大学 教授
2012年 カリフォルニア大学デービス校微生物学科 客員教授
2021年 奈良先端科学技術大学院大学 学長

けいはんなブランドと 大阪・関西万博

堀 京都やパリ、というようにけいはんなというブランドがつくれたらいいですね。

堀 ブランドは大事です。私の会社には約8,000人の社員のうち5,000人を超える外国人がいて、240人程いるPh.D(博士)のうち170人程が外国人ですが、みんな一生懸命仕事をしてHORIBAのブランドを支えてくれます。また、千年の歴史がある京都そのものにも力がある。けいはんなも、「京都」を利用したらいい。海外から優秀な研究者を招く際に、京都という名前は役に立ちます。

堀 2025年大阪・関西万博も、けいはんなの認知度を高める機会になりますね。

堀 多くの方々に幅広く注目される万博は、大きなチャンスですね。

堀 けいはんなの面白いものが沸き出してくるような企画がいいですね。また、けいはんなは京都や奈良といった歴史や伝統文化も「売り」ですから、そこにオープンイノベーションやスタートアップも加えれば面白い。

けいはんなの、これからの 都市像をイメージすると

堀 人を引き付ける機能を持った、スタートアップしやすいカルチャーを持った都市、でしょうか。

堀 今言われたことに加えて、アカデミアと企業が相互作用する、触媒や培養の機能を持った都市。ダイヤのように多面体で、見る角度によって違う輝きを持つ都市では。

堀 そこがポイントですね。すごく格好よくはないかもしれないけれど、格好いいことと、わちゃわちゃしたこと両極端が存在する都市だと思います。

対談を受け、司会者
(推進機構・小川嘉幸部長)からも一言

塩崎学長、堀場理事長とも、大変お忙しい中、対談をお引き受けいただき感謝しております。現在のけいはんな学研都市の課題から都市の将来像「あって欲しい姿」まで、短い時間で語っていただき、「けいはんなView」50号の記念すべき対談となったと考えております。対談では、「交流」、「人材」、「万博」、「多面体」など話題が多岐に及びましたが、人と人との関係を深めることが重要視されていたと思います。けいはんな学研都市には、リサーチコンプレックス事業や若手研究者交流会など研究機関や企業、研究者同士が交流する場があります。対談からは、これらの取組を発展させるだけでなく、「世界トップレベルのオープンイノベーション拠点」を目指し新たな取組を進めるけいはんなの姿が浮かんでまいりました。お二人には重ねて御礼を申し上げます。

次ページでは、前号までの「けいはんなView」49冊を見ながらけいはんなの過去を振り返って参ります。



本年3月に奈良先端科学技術大学院大学構内に完成した「山中伸弥栄誉教授記念ランニングロード」スタート地点の前で